

アフガニスタンに500本以上の井戸

ペシャワール会の中村医師が講演

アフガニスタンやパキスタンで18年間、アフガンの住民や難民の医療活動にあたってきたNGO「ペシャワール会」の中村哲医師が、各地で講演を行っている。11月17日に東京・永田町の社会文化会館で開かれた『『飢餓と戦火のアフガニスタン』中村哲医師東京講演会』（労働者住民医療機関連絡会議などでつくる実行委員会主催）には、定員を大きく上回る約1,200人が集まり、ステージ上まで聴衆があふれた。中村医師は医療活動や、大干ばつのなかでの井戸掘り、空爆後に始めた「アフガン・いのちの基金」（食糧などの支援）などについて報告した。講演要旨は次の通り。（関連記事69ページ）



パキスタンの山岳部で診察にあたる中村医師（ペシャワール会提供）

ペシャワール会は、アフガンに8カ所、パキスタンに2カ所の診療所とペシャワールの基幹病院を持っている。アフガンの5カ所はカブールにある。そこで年間20万人前後の患者を診察している。会は、専従ゼロの完全なボランティア団体で、効率のいい援助ができる。年間1億円前後の募金のうち、95%前後を現地へ送っている。活動は私1人で行っているわけではなく、4,000人の会員と、事務局の力が大きい。

最初はハンセン病の治療にあたったが、現地の病院には消毒器もなく、金属にガーゼをかぶせてオープンで焼いて消毒した。煙が出始めたら火を止め、こげているのは消毒済み、と見分けた。

外国人は文化を、「いい」、「悪い」でみてしまう。いさかいを起こし、現地にいられなくなる。そして国際会議などで「凱旋報告」し、拍手喝采を受ける。自分たちの思想を満足させればいいのか。私は医者だから患者の将来に責任を持たなければならない。だから、文化や慣習はいいさ批判しない。

1984年から91年は内戦がもっとも激烈で、アフガン国内に診療に出かけられる状態ではなかった。しかし、ハンセン病の多い地域には、マラリアや結核などほかの感染症も多く、無医地区も多かった。難民が帰る日に備えて、人を育てながら、アフガンの山岳部でさりげなく診察を行うことに方針転換した。

外国人を初めて見る人も多く、「ドクターはフランス人ですか」と聞かれた。「日本人だ」と答えると友好的になった。欧米人であれば殺されたであろう場面でも、殺されずにすんだ。

88年に旧ソ連軍が撤退を始め、国際社会は「難民が帰る」と考えたが、国内の戦闘はますます激しくなった。湾岸戦争が始まると、イスラムの反撃を恐れて、欧米の名だたる団体が逃げ出した。

92年に共産政権が倒れると、戦場が農村からカブールなどの都市に移った。難民たちは次々と国に戻った。「まずは農村復興だ」とアフガン東部に3つの診療所をつくった。私たちもうれしかった。

ところが水田が復活すると、マラリアが大流行した。帰ったばかりの人たちなど、5,000人以上の死亡を確認した。

診療所に患者が殺到したが、1日に200～300人を見るのが限度。不安を抱える人が石やロケット砲などを診療所に投げ込み、スタッフや準スタッフ、計2人が殉職した。現地では2人殺されると、2人殺さないと「恥」になるが、私は「スタッフ18人が皆殺しになっても、発砲しちゃいかん」と大

声を出した。18人死んでも活動は続くが、現地の人を敵に回したら活動ができなくなり、何万人かが死ぬことになる。

長老たちを集め、「朝から晩まで働いているのに、何という仕打ちか。首を差し出すか、診療所を守るといふ誓いを立ててくれないと出ていく」と訴えた。

マラリアの大流行を聞いた人から募金が続々と寄せられ、流行地を次々とつづして回ることができた。アフガン東部で絶大な信頼を勝ち得た。

99年から大干ばつに襲われた。WHO（世界保健機関）は「400万人が飢餓線上にあり、100万人が死ぬだろう」と訴えた。川が干上がり、農業用水も飲料水もなくなった。診療所の外来で待っている子どもの体が冷たくなっていった。家畜が死んで農業ができなくなり、村人が次々と村を出ていった。

「これは、病気をみている場合ではない。水の確保が先決だ」と、2000年7月から、井戸を掘る事業を始めた。地下水が噴き出したところには麦畑ができ、1万数千人が戻ってきた。これはうれしかったですね。砂漠地帯が緑の小麦でうまったとき、「神様にほめてほしい」と思いました。

こんな大干ばつが世界の関心をひかないわけではない。はるかに強力な外国の（援助）団体が入ってくるだろうと思っていたら、国連制裁が始まった。「ペシャワール会だけでもやろう」とカブール市内に5カ所の診療所をつくり、国内避難民の救済を始めた。100万都市のカブールには赤十字の病院が1つあるだけだった。

空爆が始まるまでに500本以上の井戸を掘った。1,000本を掘る計画を立て終えたとき、爆撃が始まった。わたしたちはとにかく、命が大事と、「アフガン・いのちの基金」を始め、現地に食糧を送り込むことを決めて活動を始めた。

※基金の振込は、郵便振替口座01790-7-6559、加入者名「ペシャワール会」。通信欄に「アフガン・いのちの基金」と記入のこと。